平成14年度教科教育課特別研修員研修資料（国語科学習指導案）

国語科学習指導案

平成１４年１１月１２日（火）第３校時
伊勢崎市立南小学校２年２組　指導者 栗﨑 純一

１　単　元　名　　お話、大すき（こんなお話を考えた）

２　単元設定の理由

（１）児童の実態　　男子２０名　　女子１５名　　計３５名

児童はこれまでに、１年生で物語の展開を考えたり、場面の様子などについて想像を広げたりしながら話を聞くことについては、いくつかの題材を通して体験してきている。２年生になっても、書くことの学習として「お手紙こうかん会」や「スイミー」の学習で、相手に伝えたいことを書くときに、組立を考えることが必要であるを学習してきた。

本単元にかかわる児童の実態を把握するために、どんな話を読むのが好きか、また自分で話を作った経験の有無、今後どんな話を作ってみたいか等を聞くと、結果は以下の通りであった。

①どんな話を読む（聞く）のが好きですか。（複数回答）
・こわい話…３０人　・冒険の話…２４人　・動物の話…２４人　・昔話…２３人

②自分で話を作ったことがありますか。
・ある…２０人　・ない…１５人
＊③は「ある」と答えた児童に、④は「ない」と答えた児童へ。

③どんな話を作りましたか。（複数回答）
・昔話（既存の昔話を改作したもの）…１０人　・キャラクターが主人公の話…１０人　・自分や友達が出てくる話…８人　・家族の話…７人　・自分が大人になったとき　の話…６人　・未来の夢の話…３人　・怖い話…３人

④どうして話を作ったことがないのですか。
・作ってみたいけど、どうやって作るのか分からない…６人　・作りたいとは思うけ　ど、時間がかかりそう…５人　・作りたいと思わない…２人　・他の遊びの方がおも　しろい…２人

上記の結果からは話作りに関して、作ったことのある児童はいろいろな話を意欲的に作っていることが分かる。また、話を作ったことのない児童でも、話作りに対して関心を示している児童の多いことが分かる。このことから、本単元の学習に対しては、話作りの経験の有無の差はあるにしても、児童は、話作りの活動を通して伝える相手に分かる言葉を考える力を育むことができると考える。

（２）教材観

本単元は、学習指導要領の国語科第１学年及び第２学年の「Ｂ書くこと」を受けて設定したものである。

本単元の中心的な学習である話作りの活動は、児童が自分で描いた絵を活用して、人物の気持ちや会話などを文章にして友達同士で読み合い、書いた文章が状況把握や登場人物のかかわりを理解できないとき、自分の力で修正することができるようにするものである。

児童は、話作りのための絵を描くときは、あらかじめそのストーリーをイメージして描くと考えられるが、実際に文章にするときは、ストーリーの一部である、絵を描いたところから書き始めると思われる。そして、児童のイメージしたストーリーのうちの残りのものは、絵に描いた部分で作った話の前後に接続することで、まとまった一つの話になると思われる。そのことで児童は、話の内容をより詳しく友達に伝えるために、続き方を考えた分かりやすい文章を書けるようになると考える。さらに、自分の作った話は友達に分かるような言葉を使って書けているのかどうかを確かめるために、小集団で友達同士が話を読み合い、相互に評価をすることで、話の中で文章や言葉の足りないところを補える文章を書けるようになると思われる。

このように、話作りの活動を通して、読み手に分かる言葉を使って文章が書けるようになると考え、本単元を設定した。

３　目　　標

○「はじめ・なか・おわり」など、自分で描いた絵を基に、簡単な組立を考えながら文章を書くとともに、作った話を友達同士で読み返し、表記の間違いや筋の通らないところを見つけたら修正することができる。

４　評価規準

観　　点	おおむね満足できる状況	十分満足できる状況
関心・意欲・態度	・話の筋が通らないところや表記の間違いに気づき、書き直そうとしている。	・正しく書き直すことができる。
書くこと	・自分の考えた話の展開にそって、筋が通らないところや表記の間違いを教えてもらって書き直している。	・自分で気づき書き直している。
言語事項	・絵に合わせて、主語と述語の続き方に気をつけて文章を書いている。	・主語と述語の続き方を考え、正しい続き方の文章を書いている。

５　指導計画（６時間予定）

過程	時間	ね　ら　い	学　習　活　動	教　師　の　支　援	評価項目
つかむ	1	・絵を見て、話のストーリーを考える。	・自分の描いた絵を基にストーリーを考え、話の場面や情景の分かるような文章を箇条書きにする。	・児童の描いた絵に対して、一人一人「どんなお話かな。」などと声をかけることで、児童が思考を明確にしやすい環境を作っていく。	関・教師に分かるように話そうとしている。
	2	・話作りを具体化していく。	・話の中の登場人物の人数やそのかかわりを明ら	・児童の描いた絵と話の場面や情景、登場人物の気持ちや	書・自分の考えた話の展開

			かにして話を作る。	会話文などが合っているかどうか等を助言する。	にそって文章が書ける。
追求する	3 4	・絵を基にした話の前後を作り、続き方を考えた文章を作る。	・自分の描いた絵を基に作った話の前後に接続する話を作る。	・話は児童の書きやすいように、前と後のどちらから書いてもいいことを助言する。 ・話は別のものではなく、最初に作った話を補うもので、内容がより詳しく、続き方を意識した文章になるよう助言する。	書・話の前後を考えた文章が書ける。 言・主語と述語の続き方に注意して文章が書ける。
まとめる	5 6	・作った話を読み合う。 ・作った話を改善し、再度読み合う。	・小集団で互いに作った話を読み合い、相互評価をし、改善点を話し合う。 ・相互評価したことを参考にして作った話を改善し、再度小集団で読み合う。	・読み手の児童には、読みながら登場人物の気持ちや状況などがよく分かったところや、よく分からなかったところをメモしながら読むように支援する。 ・改善点を認め合い、文章の向上を実感できるようにする。	関・話の順序や内容をを考えて読める。 関・友達の作った話が文章や言葉を補えたものになったことに気づくことができる。

6　本時の学習

学　習　活　動	指導上の留意点	時間	評価の観点
1　前時の学習を想起する。	○読んでくれる友達が分かるような言葉を使ったかを確認する。	3	・作った話を読み返そうとしているか。
2　本時の学習を知る。	○前時の話作りの活動で作った話をグループで読み合うことを知らせる。 ○友達の作った話を読むときは、話の場面や情景、登場人物の気持ちや会話文などがよく分かったところや、よく分からなかったところをメモしながら読むように、読む際の観点を与えるようにする。	5	・友達の作った話を「はじめ・なか・おわり」の組立に沿って書けているかを考えながら読んでいるか。 ・メモを活用しながら読んでいるか。
3　相互評価をする。	○特に分からないところに関しては、メモを十分活用するように話し、友達の作った話を読んでいる本人には質問しないよう	２０	・自分で分からない点については、よく考えながら読んでいるか。

	にすることを確認する。		
4　改善点を話し合う。	○友達によく分からなかったところを書いたメモをもらっても、それがすべて直さなければならない箇所であるとは限らないので、それをすべて直そうとしなくてもいいことを知らせる。 ○分からないとメモに書かれた言葉や文章については、話を作った本人が、「分からない」メモをした友達にと分かってもらえるように言葉で説明する。	１５	・友達からのメモを基に、進んで改善点について話し合っているか。
5　次時の予告をする。	○話を直したり、もう一度読み合ったりすることを知らせる。	2	